

台風漂流

夏から秋にかけては私たち台風一族の一番元氣な季節です。今年は本格的な台風シーズンの前に3ツを超す台風仲間が日本列島に上陸、すわ異常気象かと騒がれたという便りがありましたが、私たち台風一族にとっては心外の極みです。たまたま風まかせで漂流して行った先に日本列島があつたので横切っただけの話です。私たち台風は時には直径2千km超す巨体を持つ雲の渦ですが、実のところ見かけただおしで、自分自身ではほとんど動けずにヨットのようにな風まかせで移動させられているのです。上空5kmから7km付近の一般流と呼ばれている大きな流れがそれです。

今年はその流れがなにか変調気味なのです。流される私たち台風仲間にはわかりませんが、どうやらエルニーニョ現象が原因らしいと風のたよりです。南米ペルの沖合から赤道海域の日付変更線付近までの海面の温度が異常に高くなるもので、これが起こると活発な雲のできる場所が東にずれて地球規模で大気の流れに異常をきたすとの話です。例年の真夏では太平洋の高気圧が西に張り出して、ちようど壁のように聳えて日本付近に私たちを寄せつけません。東風でフィリッピンや中国大陸に向かわせるのですが、張出しが弱く、西の縁に沿って北上して日本付近に流されて上陸します。

夏の季節は私たちを流す風がはつきりせずに

迷走台風とありがたくない呼ばれ方をしますし、秋には偏西風に乗ると偉駄天走りだと揶揄されますが、私たち自身は忠実に流れ乗っているに過ぎないのです。でも唯一仲間同士で動けるのが、私たち台風が近づいたときです。時計と反対回りの渦が互いに引力のように引き合い、その重心の周りを回転しだすのです。藤原効果と呼んでいます。昔は、私たち台風は全て女性でしたが、今は男性の名と交互に名付けられていますのでランデブーとなることが多いのです。しかし台風が3つともなると三角関係で複雑極まりなく、何処へ流されるか皆目見当が付きません。

以前、予報精度がいまほどよくない頃に、私たちを避けて逃げたところが逆に中心に巻き込まれたという話がありました。中心気圧895mBと猛烈に発達した仲間18号の進路上にラワンを満載した貨物船がいたのです。ルソン島の北西端、時は一九六四年一月九日のことでした。船長さんの報告では、「時間に二三mB」という耳鳴りがするほどのすごい気圧の低下が続き、ついに最低気圧九〇五mBを記録、風速は85mBを超えたといっています。風速八〇mBの風が数時間も続きついに船は海岸の浅瀬に座礁して奇跡的に沈没を免れました。最近はい後予報の精度向上と情報伝達がよくなり幸いなことに悲惨な話は聞きませんのでホットしています。こんな悪玉だけでなく、本当は真水を日本に運ぶ善玉でもあることをお忘れなく。仲間が日本列島に来なければすぐに水不足となってしまう

ます。小粒の被害なし台風で水だけ運んでこいという暴論を云う人がいますが、風まかせ他力本願の私たちではどうにもならないことです。

でもこんな私たちの気紛れ進路でも偶然にも歴史の上で日本を救ったことが何度もあつたのです。古くは鎌倉時代の蒙古襲来を撃退した神風です。二回の元寇のうち少なくとも一回は、晩て台風たつたと確信しています。もう一つは明治維新のおりに榎本武揚率いる旧幕府艦隊に大打撃を与えて、時の維新政府を助けたのも日本列島の南海上を通過した二月の台風、私たちの祖先でした。江戸脱出直後に襲われた榎本艦隊は小さな艦船と補給船の多くを失い、最新鋭の軍艦開陽丸にも舵に被害を与えました。このため東北での戦いに遅れをとって明治政府を助けたのです。

ついに旗艦開陽丸が江差の海岸で冬の猛烈な嵐に巻き込まれて座礁、暴風雪のなかあえなく海の藻屑と消えてしまいました。自然からの再三再四の攻撃で大打撃を被った榎本軍は政府軍の前に降伏しました。台風ではじまり冬疾風で止めを刺された榎本武揚は後日、荒井郁之助とともに、日本にける近代の気象学の草分けとして黎明期を築いたと聞きました。私たちの祖先が気象の発展に寄与したのも歴史の必然だったのでしょうか。

私たち台風一族は過去から未来永劫、他力本願で全て自然がなすがままです。ですから炭酸ガスの増加で地球が暑くなるという地球温暖化が進むと一族の行く末が心配です。台風が巨大

化するとか、数が逆に減るとかパラメータを変えたら別の結果が出たとか、まさに百家争鳴の予測です。たしかに海の温度が上がれば私たちの食糧である水蒸気が増加するでしょう。しかしその食糧を集める大きな循環システムがどうやってどこにできるのか、小粒でたくさんなのか、巨大台風なのか。私たち台風一族の一生は以外にデリケートなのです。それが故に地球の行く末とともに私たち台風の子孫の未来が心配です。